澤鹵。非可居也。和親甚便。漢許之。

孝文皇帝前六年。漢遣匈奴書曰。皇帝敬問匈奴大單于無恙。使郎中係雩淺遺朕書曰。右賢王不請。聽後義盧侯難氏等計。絕二主之約。離兄弟之親。漢以故不和。鄰國不附。今以小吏敗約故。罰右賢王。使西擊月氏。盡定之。願寢兵。休士卒。養馬。除前事。復故約。以安邊民。使少者得成其長。老者安其處。世世平樂。朕甚嘉之。此古聖主之意也。漢與匈奴約爲兄弟。所以遺單于甚厚。倍約離兄弟之親者。常在匈奴。然右賢王事已在赦前。單于勿深誅。單于若稱書意。明告諸吏。使無負約有信。敬如單于書。

使者言單于自將伐國

孝文帝の前の六年、漢、匈奴に書を遺りて曰はく、『皇帝敬みて匈奴の大單于に問ふ、恙無しや。郎中係雩淺をして朕に書を遺らしめ、曰はく、「右賢王、請はずして、後義・盧侯・難氏等の計を聽き、二主の約を絕ち、兄弟の親を離す。漢、故を以て、和せず、鄰國、附かず。今、小吏が約を敗るの故を以て、右賢王を罰し、西のかた月氏を擊たしめ、盡くこれを定めたり。願はくは兵を寢め、士卒を休め、馬を養ひ、前の事を除き、故の約を復し、以て邊民を安んじ、少者をして其長を成すを得、老者をして其處に安んじ、世世平樂ならしめん」と。朕甚だ之を嘉す。此れ古の聖主の意なり。漢、匈奴と約して兄弟と爲り、單于に遺る所以甚だ厚し。約に倍きて兄弟の親を離す者は、常に匈奴に在り。然れども右賢王の事は、已に赦の前に在り。單于、深く誅むる勿かれ。單于、若し書の意に稱ひ、明かに諸吏に告げ、約に負く無くして信有らしめば、敬みて單于の書の如くせん。

1 澤鹵。沼澤と山鹽とのある地なり。

1 右賢王の事は、已に赦の前に在り云云。右賢王が爲しし事は、大赦以前の事なるが故に、單于、之を宥恕し、深く之を詰責すること勿かれ。

使者言ふ、單于自ら將とし、國を伐ちて功有り、甚だ兵事に苦しめりと。

有功。甚苦兵事。服繡袷綺衣。繡袷長襦。錦袷袍各一。比余一。黃金飾具帶一。黃金胥紕一。繡十匹。錦三十匹。赤綈綠繒各四十匹。使中大夫意。謁者令肩遣單于。

後頃之。冒頓死。子稽粥立。號曰老上單于。老上稽粥單于初立。孝文皇帝復遣宗室女公主。爲單于閼氏。使宦者燕人中行

服[1]の繡袷綺衣・繡袷長襦[2]・錦袷袍[3]・各〻一、比余[4]一、黃金飾具帶[5]、黃金の胥紕[6]一、繡十匹、錦三十匹、赤綈[7]・綠繒各〻四十匹、中大夫意・謁者令肩をして單于に遺らしむ』と。

1 服とは天子自ら服する所なるを言ふなり。繡袷綺衣は、刺繡したる絹を表とし、綺(あかぎぬ)を裏としたる袷衣なり。袷は衣に絮無きなり。2 繡袷長襦。刺繡したる絹を表としたる袷の長襦袢なり。3 錦袷袍。錦を表としたる袷の袍。袍は上に著る衣なり。4 比余は櫛なり。一說には辮髮の飾なりと。5 黃金飾具帶。黃金にて裝飾を施したる帶。一說に具は貝の誤なりと曰ふ。6 胥紕は革帶の鉤なり。7 赤綈。綈は厚き繒なり。

後、之を頃くして冒頓死し、子稽粥立つ。號して老上單于と曰ふ。老上稽粥單于初めて立つや、孝文皇帝復た宗室[1]の女の公主を遣はして、單于の閼氏[2]と爲し、宦者燕人中行說をして公主に傳たらしむ。說、行くを欲せず。漢[3]彊ひて之を使ふ。說曰はく、『必ず[4]我が行なり、漢の患を爲さん者は』と。

1 宗室の女の公主を遣はして云云。漢帝の一族の女を公主と稱して、匈奴に遣はして單于の妻と爲すなり。漢書には公主を翁主に作る。2 中行は姓。說は名。音エツ。3 漢彊ひて之を使ふ。漢、說が匈奴に行くを欲せざるに、强ひて說をして公主の傅として匈奴に往かしむるなり。4 必ず我が行なり、漢の患を爲さん者は。「漢の患を爲さん者は、必ず我が行なり」と曰ふと同じ意なり。倒裝句法なり。

說傳公主。說不欲行。漢彊使之。說曰。必我行也爲漢患者。

中行說既至。因降單于。單于甚親幸之。

初匈奴好漢繒絮食物。中行說曰。匈奴人衆不能當漢之一郡。然所以彊者。以衣食異。無仰於漢也。今單于變俗。好漢物。漢物不過什二。則匈奴盡歸於漢矣。其得

中行說既に至り、因つて單于に降る。單于甚だ之を親幸す。

1 至るとは匈奴に至るなり。2 親幸。親近寵幸するなり。

初め匈奴は漢の繒絮[1]・食物を好めり。中行說曰はく、『匈奴の人衆は、漢の一郡に當る能はず。然るに彊き所以は、衣食異にして・漢に仰ぐ無きを以てなり。今、單于、俗を變じ、漢の物を好まば、漢[2]の物、什の二に過ぎずして、則ち匈奴は盡く漢に歸せん。其れ漢の繒絮を得ば、以て草棘[3]の中を馳せよ。衣袴皆裂[4]敝せん。以て旃裘[5]の完善なるに如かざるを示せ。漢の食物を得ば、皆、之を去て[6]、以て湩酪[7]の便美なるに如かざるを示せ』と。是に於て、說、單于の左右に疏[8]記を敎へ、以て其人衆畜物を計課[9]す。

漢繒絮以馳草棘中。衣袴皆裂敝。以示不如旃裘之完善也。得漢食物皆去之。以示不如湩酪之便美也。於是說敎單于左右疏記。以計課其人衆畜物。

漢遺單于書。牘以尺一寸。辭曰。皇帝敬問匈奴大單于無恙。所遺物及言語云云。中行說令單于遺漢書以尺二寸牘。及印封

1 繒絮。絹と綿となり。2 漢の物。什の二に過ぎずして、則ち匈奴は盡く漢に歸せん。漢、物を費すこと十分の二に過ぎずして、匈奴の人衆盡く漢に服從せん。3 草棘の中。雜草と荊棘との生ひ茂りたる處。4 裂敝。裂け破るるなり。5 旃は毛織物。裘は皮衣。6 去は棄つるなり。7 湩は乳汁。酪は乾酪。便美は便利にして美味なり。8 疏記は箇條書きにして記錄するなり。9 計課は取調べ計算するなり。

漢、單于に書を遺るに、牘、尺一寸を以てす。辭に曰はく、『皇帝敬みて匈奴の大單于に問ふ、恙無しや。遺る所の物及び言語云云』と。中行說、單于をして漢に書を遺らしむるに、尺二寸の牘を以てし、及び印封、皆、廣大にして長からしめ、其辭を倨傲にす。曰はく、『天地の生ずる所、日月の置く所なる、匈奴の大單于、敬みて漢の皇帝に問ふ、恙無しや。以て遺る所の物、言語亦云云』と。

皆令廣大長。倨傲其辭。曰天地所生。日月所置。匈奴大單于。敬問漢皇帝無恙。所以遺物言語亦云云。

漢使或言曰。匈奴俗賤老。中行說窮漢使曰。而漢俗屯戍從軍當發者。其老親豈有不自脫溫厚肥美。以齎送飲食行戍乎。漢使曰。然。中行說曰。匈奴明以戰攻爲事。其老弱不能鬬。故以

1 牘。文字を書き記す札。木簡なり。2 印封。印章を捺して封ずるなり。3 倨傲は尊大傲慢なり。

漢の使或は言つて曰はく、『匈奴の俗は老を賤しむ』と。中行說、漢の使を窮めて曰はく、『而の漢の俗、屯戍して軍に從ひ當に發すべき者に、其老親、豈に自ら溫厚肥美を脫して以て飲食を行戍に齎送せざる有らんや』と。漢の使曰はく、『然り』と。中行說曰はく、『匈奴は明かに戰攻を以て事と爲す。其老弱は鬬ふ能はず。故に其肥美を以て壯健なる者に飲食せしむ。蓋し以て自ら守衞を爲す。此の如くにして、父子各〻久しく相保つを得るなり。何を以て匈奴は老を輕んずと言ふか』と。

1 窮。詰り責むるなり。2 屯戍。駐屯して守備するなり。3 溫厚は厚くして溫暖なる衣服なり。肥美は肥えて美味なる肉なり。行戍は行きて守備の任に當る者、即ち從軍者なり。齎送は、もたらし、おくる。

其肥美飲食壯健者。蓋以自爲守衛。如此。父子各得久相保。何以言匈奴輕老也。

漢使曰。匈奴父子乃同穹廬而臥。父死。妻其後母。兄弟死。盡取其妻妻之。無冠帶之飾。闕庭之禮。

漢の使曰はく、『匈奴は、父子乃ち穹廬を同じくして臥し、父死すれば、其後母を妻とし、兄弟死すれば、盡く其妻を取りて之を妻とす。冠帶の飾・闕庭の禮無し』と。

1穹廬。天幕なり。2冠帶の飾。衣冠束帶の美しき禮服をいふ。3闕庭の禮。朝廷に於ての禮儀なり。

中行說曰。匈奴之俗。人食畜肉。飲其汁。衣其皮。畜食草飲水。隨時轉移。故其急則

中行說曰はく、『匈奴の俗、人は畜肉を食ひ、其汁を飲み、其皮を衣、畜は草を食ひ水を飲み、時に隨つて轉移す。故に其の急なれば則ち人、騎射を習ひ、寬なれば則ち人、無事を樂しむ。其約束は輕くして・行ひ易きなり。君臣簡易にして、一國の政は、猶ほ一身のごときなり。父子

人習騎射。寬則人樂無事。其約束輕易行也。君臣簡易。一國之政。猶一身也。父子兄弟死。取其妻妻之。惡種姓之失也。故匈奴雖亂。必立宗種。

兄弟死すれば、其妻を取りて之を妻とするは、種姓の失はれんことを惡めばなり。故に匈奴は亂ると雖も、必ず宗種を立つ。

1畜肉。家畜の肉なり。2汁。乳汁なり。3急は戰時をいひ、寬は平時をいふ。4種姓の失はれんことを惡めばなり。其家の系統の斷絕せんことを惡むを以てなり。5宗種。同宗の種族なり。

今中國雖詳不取其父兄之妻。親屬益疏則相殺。至乃易姓。皆從此類。且禮義之敝。上下交怨望。而室屋之極。生力必屈。

今、中國は、詳に其父兄の妻を取らずと雖も、親屬益〻疏なれば、則ち相殺す。乃ち姓を易ふるに至るは、皆、此類に從ふなり。且つ禮義の敝は、上下交〻怨望し、而して室屋の極は、生力必ず屈く。

1詳に。表面を飾りての意。漢書には詳を陽に作る。詳も亦音ヤウ。2親屬益〻疏なれば則ち相殺す。親族の關係だん〳〵疏遠になるときは相互に殺害するに至る。3姓を易ふ。革命行はれて帝王の姓易はるをいふ。4皆、此類に從ふなり。皆、上に述べる類によりて起るなり。5禮義の敝は、上下交〻怨望し云云。忠信衰へて薄くして、彊ひて禮義を爲すが故に、其末流、怨恨彌〻起る。家屋を造る

夫力耕桑以求衣食。築域郭以自備。故其民。急則不習戰功。緩則罷於作業。嗟土室之人。顧無多辭。令喋喋而佔佔。冠固何當。

自是之後。漢使欲辯論者。中行說輒曰。漢使無多言。顧漢所輸匈奴繒絮米蘖。令

が爲めに、土木工事競ひ起り、勞役甚だ重く、其結果、生活力屈竭するに至る。

夫れ耕桑を力めて以て衣食を求め、城郭を築きて以て自ら備ふ。故に其民急なれば則ち戰攻を習はず、緩なれば則ち作業に罷る。嗟、土室の人、顧ふに多辭する無かれ。喋喋として佔佔たらしむとも、冠は固に何にか當らん』と。

1耕桑を力む。耕作と養蠶とに力を竭すなり。2土室の人。土を以て作りたる家に住居する人、卽ち漢人をさす。3多辭。多言するなり。4喋喋は利口の貌。多辯なり。佔佔は衣裳を整ふる貌。利口にして多辯し、衣裳を整へて著飾るとも、衣冠は何の用をも爲すものに非ず。

是れよりの後、漢の使、辯論せんと欲すれば、中行說輒ち曰はく、『漢の使、多言する無かれ。顧ふに漢が匈奴に輸る所の繒絮米蘖を、其量中りて必ず善美ならしめんのみ。何を以て言を爲さんや。且つ給する所備はりて善ならば則ち已まん。備はらずして苦惡ならば、則ち秋孰を候つて

其量中。必善美而已矣。何以爲言乎。且所給備善則已。不備苦惡。則候秋孰。以騎馳蹂而稼穡耳。日夜敎單于候利害處。

漢孝文皇帝十四年。匈奴單于十四萬騎入朝那蕭關。殺北地都尉卬。虜人民畜産甚多。遂至彭陽。使奇兵入燒回中宮。候騎至雍甘泉。

騎を以て而の稼穡を馳蹂せんのみ』と。日夜、單于に利害の處を候ふを勸む。

1蘖は麴なり。2量中るとは其數に滿つるなり。3苦惡は麤惡なり。4秋孰は秋に至りて穀物の成熟する時なり。稼穡は農作物をいふ。馳蹂は、馳せまはりて、ふみにじるなり。5利害の處。漢に攻め入るに便利なる處をいふ。

漢の孝文皇帝の十四年、匈奴の單于の十四萬騎、朝那・蕭關に入り、北地の都尉卬を殺し、人民畜産を虜にすること甚だ多く、遂に彭陽に至り、奇兵をして入りて回中宮を燒かしむ。候騎、雍の甘泉に至る。

1朝那。縣の名、漢僅く。故城は今の甘肅省平涼縣の西北に在り。2蕭關。地名。今の甘肅省固原縣の東南に在り。關中の四關の一たり。北面の險なり。3彭陽。漢の縣の名。故城は今の甘肅省鎭原縣の東に在り。4回中宮。括地志に云ふ、『秦の回中宮は、岐州雍縣の西四十里に在り。卽ち匈奴の燒く所の者なり』と。雍縣は今の陝西縣鳳翔縣の南に在り。5候騎。斥候の騎兵なり。6甘泉。本、秦の離宮。今の陝西省淳化縣の西北に在り。

於是文帝以中尉周舍。郎中令張武爲將軍。發車千乘。騎十萬。軍長安旁。以備胡寇。而拜昌侯盧卿爲上郡將軍。甯侯魏遫爲北地將軍。隆盧侯周竈爲隴西將軍。東陽侯張相如爲大將軍。成侯董赤爲前將軍。大發車騎。往擊胡。

是に於て、文帝、中尉周舍・郎中令張武を以て將軍と爲し、車千乘・騎十萬を發して長安の旁に軍し、以て胡の寇に備へ、而して昌侯盧卿を拜して上郡將軍と爲し、甯侯魏遫を北地將軍と爲し、隆慮侯周竈を隴西將軍と爲し、東陽侯張相如を大將軍と爲し、成侯董赤を前將軍と爲し、大に車騎を發し、往きて胡を擊たしむ。

1上郡將軍、北地將軍、隴西將軍。並に駐屯する地を以て將軍の名とするなり。隆は音リン。

單于留塞內月餘。乃去。漢逐出塞。卽還。

單于、塞內に留まること月餘にして、乃ち去る。漢、逐うて塞を出で、卽ち還る。殺す所有る能はず。匈奴、日に已て驕り、歲ごとに邊に入り、

不能有所殺。匈奴日已驕。歲入邊。殺略人民畜產甚多。雲中遼東最甚。至代郡萬餘人。漢患之。乃使使遺匈奴書。單于亦使當戶報謝。復言和親事。

人民畜產を殺略すること甚だ多し。雲中・遼東最も甚だしく、代郡に至るまで萬餘人なり。漢、之を患ふ。乃ち使をして匈奴に書を遺らしむ。單于も亦、當戶をして報謝せしめ、復た和親の事を言ふ。

1塞內。漢の國境內をいふ。2萬餘人。殺略されたる人民の數なり。3當戶は匈奴の官名なること前に見ゆ。報謝は返書を送りて恩を謝するなり。

孝文帝後二年。使使遺匈奴書曰。皇帝敬問匈奴大單于無恙。使當戶且居雕渠難。郎中韓遼。遺朕馬二匹。已至。敬受。

孝文帝の後の二年、使をして匈奴に書を遺らしめて曰はく、『皇帝敬みて匈奴の大單于に問ふ、恙無しや。1當戶且居雕渠難・郎中韓遼をして、朕に馬二匹を遺らしむ。已に至り、敬みて受く。

1當戶も且居も共に官名。上文には且渠に作る。雕渠難は人の姓名。此れ一人にして二官と爲るなり。

先帝制。長城以北。引弓之國。受命單于。長城以內。冠帶之室。朕亦制之。使萬民耕織射獵衣食。父子無離。臣主相安。俱無暴逆。

今聞渫惡民。貪降其進取之利。倍義絕約。忘萬民之命。離兩主之驩。然其事已在前矣。

書曰。二國已和親。兩

[1]先帝の制に、長城以北、弓を引くの國は、命を單于に受け、長城以內、冠帶の室は、朕亦之を制し、萬民をして耕織射獵衣食せしめ、父子、離るる無く、臣主相安んじ、俱に暴逆する無からんと。

1先帝の制。高祖の制詔の此の如くなるを言ふ。

今聞く、渫惡[1]の民、貪りて[2]其進取の利に降り、義に倍き約を絕ち、萬民の命[3]を忘れ、兩主の驩[4]を離すと。然れども其事は已に前に在り。

1渫惡は邪惡不正なり。渫は汙るるなり。2貪りて其進取の利に降る。降るは下るなり。貪慾にして、其心、利に下りて、進取を計るなり。3命は生命なり。4兩主。漢帝と單于とをいふ。

書[1]に曰はく、二國已に和親し、兩主驩[2]說し、兵を寢め、卒を休め、馬を

主驩說。寢兵。休卒。養馬。世世昌樂。闞然更始。朕甚嘉之。

聖人者日新。改作更始。使老者得息。幼者得長。各保其首領。而終其天命。朕與單于俱由此道。順天恤民。世世相傳。施之無窮。天下莫不咸便。

漢與匈奴。鄰國之敵。匈奴處北地寒。殺氣早降。故詔吏。遺單

養ひ、世世昌[3]樂し、闞然として更始せん」と。朕甚だ之を嘉す。

1書。單于より來りたる書をいふ。2驩說は歡悅なり。3昌樂。繁昌して和樂するなり。4闞然は安定の貌。和合する貌。更始は革新なり。あらため、始むるなり。

聖人は日に新に、改作更始し、老者をして息[2]ふを得、幼者をして長[3]ずるを得、各〻其首領[4]を保ちて、其天命を終へしむ。朕、單于と、俱に此道に由り、天に順ひ民を恤み、世世相傳へて、之を無窮に施さば、天下、咸く便[5]とせざるもの莫からん。

1改作更始。過ちたるを改め弊害を更めて、新らしき政治を始むるなり。2息は休息するなり、3長は成長するなり。4其首領を保つ。生命を保つをいふ。5便は便利として安定するなり。

漢と匈奴とは、鄰國[1]の敵なり。匈奴は北地に居りて寒く、殺氣早く降る。故に吏に詔して、單于に秫蘖[2]・金帛・絲絮・佗物を遺ること、歲に數有り。

于秫蘗金帛絲絮佗物歲有數。

今天下大安。萬民熙熙。朕與單于。爲之父母。朕追念前事。薄物細故。謀臣計失。皆不足以離兄弟之驩。

朕聞天不頗覆。地不偏載。朕與單于。皆捐往細故。俱蹈大道。墮壞前惡。以圖長久。使兩國之民。若一家子。元元萬民。下及魚鼈。

1鄰國の敵。一本には「鄰敵の國」に作る。漢書も亦然り。鄰國にして勢力相匹敵するの國なり。2秫は稷の黏りたる者。以て酒をつくる。蘗は麴。佗物は其他の物なり。

今、天下大に安く、萬民熙熙[1]たり。朕と單于と、之が父母たり。朕、前事を追念[2]するに、薄物[3]細故にして、謀臣の計失せり。皆、以て兄弟の驩を離すに足らず。

1熙熙。和樂の貌。2追念。後日に至つて前の事を念ふなり。3薄物細故。瑣細なる事故なり。物は事なり。細故は細事なり。

朕聞く、天は頗覆せず、地は偏載せずと。朕、單于と、皆、往の細故を捐て、俱に大道を蹈み、前惡を墮壞し、以て長久を圖り、兩國の民をして、一家の子の若く、元元萬民より、下は魚鼈に及び、上は飛鳥に及び、跂行喙息蠕動の類までをして、安利に就きて危殆を辟けざる莫からしめん。

1天は頗覆せず、地は偏載せず。天は物をおほふに偏頗不公平ならず、地は物を載するに偏頗不公平ならず、天地は公平無私なり。2墮壞。破壞するなり。墮は音キ、毀るなり。3元元。元は民なり。元は善なり、民の類は善なり、故に元と稱す。元元萬民は善良なる萬民をいふ。4跂行は凡そ足有りて行く者。喙息は凡そ口有りて息する者。蠕動は、うね〳〵と動く者。鳥獸昆蟲蚯蚓等すべての生物をいふ。5危殆。殆も危きなり。

上及飛鳥。跂行喙息蠕動之類。莫不就安利而辟危殆。

故來者不止。天之道也。俱去前事。朕釋逃虜民。單于無言章尼等。

故に來る者は止めざるは、天の道なり。俱に前事を去てん。朕は逃虜の民を釋さん。單于は章尼等を言ふ無かれ。

1逃虜の民。漢人の逃げて匈奴に入りたる者をいふ。2章尼。匈奴に背きて漢に降りたる人なり。

朕聞古之帝王。約分明而無食言。單于留志。天下大安。和親之後。漢過不先。單于其察之。

朕聞く、古の帝王は、約[1]・分明にして・言を食む無しと。單于、志[2]を留めば、天下大に安からん。和親の後は、漢の過、先だたざらん。單于其れ之を察せよ』と。

1約は約束なり。言を食むとは、終に不信を爲し、其前言を棄つること、食つて盡すが如きをいふ。2志を留むとは、和親の計を念ふなり。3漢の過先だたざらん。漢は決して匈奴に先だつて約に負くこと無かるべし。

單于既約和親。於是制詔御史曰。匈奴大單于遺朕書。言和親。已定。亡人不足以益衆廣地。匈奴無入塞。漢無出塞。犯令約者殺之。可以久親。後無咎。俱便。朕已許之。其布告天下。使明知之。

單于既に和親を約す。是に於て、御史に制詔して曰はく、『匈奴の大單于、朕に書を遺りて和親を言ひ、已に定まれり。亡人[1]は、以て衆を益し地を廣むるに足らず。匈奴は塞に入る無く、漢は塞を出づる無からん。令約を犯す者は之を殺さん。以て久しく親しむ可く、後に咎無く、俱に便ならん。朕已に之を許せり。其れ天下に布告し、明かに之を知らしめよ』と。

1亡人。逃亡したる者。

後四歲。老上稽粥單于死。子軍臣立爲單于。既立。孝文皇帝復與匈奴和親。而中行說復爲之。軍臣單于立。

後四歲にして、老上稽粥單于死し、子軍臣立ちて單于と爲る。既に立ち、孝文皇帝復た匈奴と和親す。而して中行說復た之に事ふ。軍臣單于立ち

行說復事之。軍臣單于立四歲。匈奴復絕和親。大入上郡雲中。各三萬騎。所殺略甚衆而去。

於是漢使三將軍軍屯北地。代屯句注。趙屯飛狐口。緣邊亦各堅守。以備胡寇。又置三將軍。軍長安西細柳。渭北。棘門。霸上。以備胡。胡騎入代句注邊。烽火通於甘泉長安。數月。

1子軍臣立ちて單于と爲る。徐廣曰はく、『後元三年立つ』と。2軍臣單于立ちて四歲。徐廣曰はく、『孝文は後元七年に崩ず。而して二年、單于の書に答ふ。其間五年なり。而るに此に「後四年」又「立ちて四歲」と云ふ。數、爾る容からざるなり。孝文の後の六年冬、匈奴、上郡・雲中に入るなり』と。

是に於て、漢、三將軍の軍をして北地に屯せしむ。代は句注[1]に屯し、趙は飛狐[2]の口に屯し、緣邊[3]、亦各〻堅く守り、以て胡の寇に備ふ。又、三將軍を置きて、長安の西の細柳・渭北・棘門・霸上に軍せしめ、以て胡に備ふ。胡騎、代・句注の邊に入り、烽火[5]、甘泉・長安に通ず。數月にして、漢の兵、邊に至る。匈奴も亦去りて塞に遠ざかる。漢の兵も亦罷む。

1句注は山の名。卽ち山西省雁門山なり。今の代縣の西北に在り。2飛狐の口。飛狐は嶺の名。今、黑石嶺と曰ふ。河北省淶源縣の北に在り、蔚縣の界に跨る。其地、兩崖峭立し、一線微に通じ、迤邐たること百餘里。3緣邊。邊境の地なり。4三將軍。周亞夫、徐厲、劉禮なり。5烽火、甘泉・長安に通ず。警を報ずる烽

漢兵至邊。匈奴亦去遠塞。漢兵亦罷。

後歲餘。孝文帝崩。孝景帝立。而趙王遂乃陰使人於匈奴。吳楚反。欲與趙合謀入邊。漢圍破趙。匈奴亦止。自是之後。孝景帝復與匈奴和親。通關市。給遺匈奴。遺公主。如故約。終孝景時。時小入盜邊。無大寇。

火、相傳へて甘泉より長安に通ず。

後歲餘にして、孝文帝崩じ、孝景帝立つ。而して趙王遂乃ち陰に人を匈奴に使す。吳楚反するとき、趙と謀を合はせて邊に入らんと欲す。漢圍みて趙を破る。匈奴も亦止む。是れよりの後、孝景帝、復た匈奴と和親し、[2]關市を通じ、匈奴に給遺し、公主を遣ること、故の約の如し。孝景の時を終るまで、時に小しく入りて邊に盜すれども、大に寇する無し。

1 匈奴と和親す。孝景帝の元年四月、御史大夫陶青を遣はして和親す。二年、復た與に和親す。2 關市を通ず。關所に於て貿易を爲すなり。3 給遺。中國の物資を贈遺するをいふ。4 公主。漢書には翁主に作る。五年、公主を遣る。5 時に小しく入りて邊に盜す。孝景の中の二年、燕に入る。六年、雁門に入り、武泉に至り、上郡に入る。後の二年、雁門に入る。

今帝卽位。明和親約束。厚遇。通關市。饒給之。匈奴自單于以下皆親漢。往來長城下。

漢使馬邑下人聶翁壹紆蘭出物。與匈奴交。詳爲賣馬邑城。以誘單于。單于信之。而貪馬邑財物。乃以十萬騎入武州塞。

漢伏兵三十餘萬馬邑旁。御史大夫韓安國

今帝、位に卽き、和親の約束を明かにし、厚く遇し、關市を通じ、之に饒給す。匈奴、單于より以下、皆、漢に親しみ、長城の下に往來す。

1 今帝。孝武帝なり。2 饒給。多く物資を供給するなり。

漢、馬邑下の人聶翁壹をして、紆蘭して物を出し、匈奴と交はり、詳りて馬邑城を賣るまねし、以て單于を誘はしむ。單于、之を信じ、而して馬邑の財物を貪り、乃ち十萬騎を以て武州の塞に入る。

1 聶翁壹。衞青傳には唯だ聶壹と稱す。顏師古曰はく、『姓は聶、名は壹、翁とは老人の稱なり』と。2 紆蘭。紆は干闌なり。禁を犯して塞を出でて交易するなり。3 武州。縣の名。漢置く。故城は今の山西省左雲縣の南に在り。

漢、兵三十餘萬を馬邑の旁に伏す。御史大夫韓安國、護軍たり、四將軍を護し、以て單于に伏す。單于旣に漢の塞に入り、未だ馬邑に至らざ

爲護軍。護四將軍。以伏單于。單于既入漢塞。未至馬邑百餘里。見畜布野而無人牧者。怪之。乃攻亭。是時雁門尉史行徼。見寇葆此亭。知漢兵謀。單于得。欲殺之。尉史乃告單于漢兵所居。單于大驚曰。吾固疑之。乃引兵還。出曰。吾得尉史天也。天使若言。以尉史爲天王。

ること百餘里、畜・野に布けども人の牧する者無きを見て、之を怪しみ、乃ち亭[2]を攻む。是の時、雁門の尉史、徼[3]を行る。寇を見て、此亭に葆[4]す。漢[5]の兵の謀を知る。單于得て、之を殺さんと欲す。尉史乃ち單于に漢の兵の居る所を告ぐ。單于大に驚きて曰はく、『吾固より之を疑へり』と。乃ち兵を引きて還り、出[6]でて曰はく、『吾、尉史を得たるは、天なり。天、若をして言はしむ』と。尉史を以て天王[7]と爲す。

1 單于に伏す。兵を伏して單于の來るを待つなり。2 亭。亭障なり。3 徼を行る。邊徼の要塞を巡行するなり。4 葆は保と通ず。保守するなり。5 漢の兵の謀を知る。雁門の尉史、漢の兵の謀を知り居りしなり。漢書には、『時に雁門の尉史、徼を行り、寇を見て、此亭に保す。單于得て、之を刺さんと欲す。尉史、漢の謀を知り、迺ち下り、具に單于に告ぐ』云云とあり。解し易し。6 出づとは塞を出づるなり。7 天王。周壽昌曰はく、『匈奴、天を以て重しと爲す。猶ほ天の封ずる所の王と云ふがごときなり』と。

漢兵約單于入馬邑而縱。單于不至。以故漢兵無所得。漢將軍王恢部。出代擊胡輜重。聞單于還兵多。不敢出。漢以恢本造兵謀而不進斬恢。

漢の兵・約すらく、『單于、馬邑に入らば縱たん』と。單于、至らず。故を以て漢の兵、得る所無し。漢の將軍王恢の部、代を出でて胡の輜重を擊つ。[2]單于の還るとき兵多しと聞き、之を追はば敗られんことを恐して而も進まざるを以て、恢を斬る。

1 縱たん。兵を放ちて以て單于を擊たん。2 單于の還るとき兵多しと聞き、敢て出でず。單于が引き上げたるとき軍勢多しと聞き、之を追はば敗られんことを恐れ、敢て出でて擊たず。3 漢、恢が本兵謀を造して云云。漢の朝廷は、王恢が本來匈奴征伐の謀を首唱しながら、進み擊たざりしを以て、王恢を斬に處す。韓長孺傳には、恢自殺す、と曰ふ。

自是之後。匈奴絕和親。攻當路塞。往往入盜於漢邊。不可勝數。然匈奴貪。尙樂關市。嗜漢財物。漢亦尙關市。不絕以中之。

是れよりの後、匈奴、和親を絕ち、[1]當路の塞を攻め、往往入りて漢の邊に盜すること、勝げて數ふ可からず。然れども匈奴貪りて、尙ほ關市を樂しみ、漢の財物を嗜む。漢も亦尙ほ關市し、[2]絕たずして以て之に中つ。

1 當路の塞。匈奴の行く道に當る要塞なり。2 絕たずして以て之に中つ。關市通商の利を以て、匈奴の意に投合し、侵盜する無きを冀ふなり。

自馬邑軍後五年之秋。漢使四將軍各萬騎。擊胡關市下。將軍衛青出上谷至蘢城。得胡首虜七百人。公孫敖出雲中。無所得。公孫敖出代郡。爲胡所敗七千餘人。李廣出雁門。爲胡所敗。而匈奴生得廣。廣後得亡歸。漢囚敖廣。敖廣贖爲庶人。

[1]馬邑の軍より後五年の秋、漢、四將軍をして各〻萬騎にして胡を關市の下に擊たしむ。將軍衛青は、上谷より出で、蘢城に至り、胡の首虜を得ること七百人。公孫敖は、雲中より出で、得る所無し。公孫敖は、代郡より出で、胡の敗る所と爲ること、七千餘人。李廣は、雁門より出で、胡の敗る所と爲る。而して匈奴、廣を生得[2]す。廣、後、亡げ歸るを得たり。漢、敖・廣を囚ふ。敖・廣、贖うて庶人と爲る。

1馬邑の軍より後五年の秋。漢書武帝紀に、『元光六年春、匈奴、上谷に入り、吏民を殺略す』云云とあり。秋の字は誤なり。當に春に作るべし。2生得。いけどりにする也。事は李廣傳に詳かなり。

其冬。匈奴數入盜邊。漁陽尤甚。漢使將軍韓安國屯漁陽備胡。

[1]其冬、匈奴數〻入りて邊に盜す。漁陽尤も甚だし。漢、將軍韓安國をして、漁陽に屯して胡に備へしむ。

其明年秋。匈奴二萬騎入漢。殺遼西太守。略二千餘人。胡又入敗漁陽太守軍千餘人。圍漢將軍安國。安國時千餘騎。亦且盡。會燕救至。匈奴乃去。匈奴又入雁門。殺略千餘人。於是漢使將軍衛青將三萬騎出雁門。李息出代郡擊胡。得首虜數千人。

[1]其明年秋、匈奴の二萬騎、漢に入り、遼西の太守を殺し、二千餘人を略す。胡、又入りて漁陽の太守の軍千餘人を敗り、漢の將軍安國を圍む。安國、時に千餘騎あり、亦且に盡きんとす。會〻燕の救至る。匈奴乃ち去る。匈奴、又、雁門に入り、千餘人を殺略す。是に於て、漢、將軍衛青をして、三萬騎を將ゐて、雁門より出で、李息をして代郡より出で、胡を擊たしむ。首虜を得ること數千人。

1其明年。即ち元朔元年なり。

1其冬。梁玉繩曰はく、『此れ元光六年の冬を言ふなり。然れども武紀には是れ秋とす』と。

其明年。衞青復出雲中以西至隴西。擊胡之樓煩白羊王於河南。得胡首虜數千。牛羊百餘萬。於是漢遂取河南地。築朔方。復繕故秦時蒙恬所爲塞。因河爲固。漢亦棄上谷之什辟縣造陽地以予胡。是歲漢之元朔二年也。

其後冬。匈奴軍臣單于死。軍臣單于弟左谷蠡王伊稚斜自立爲

[1]其明年、衞青復た雲中以西に出で、隴西に至り、胡の樓煩・白羊王を河南に擊ち、胡の首虜數千・牛羊百餘萬を得たり。是に於て、漢遂に河南の地を取り、朔方に築く。復た故の秦の時蒙恬が爲りし所の塞を繕め、河に因りて固めと爲す。漢も亦、上谷の什辟縣の造陽の地を棄てて以て胡に予ふ。是の歲は、漢の元朔二年なり。

1其明年。卽ち下文に言ふが如く、元朔二年なり。2繕。修繕するなり。3什辟縣。什辟は當に斗辟に作るべし。斗辟縣とは、斗曲して僻遠にして匈奴の界に入りたる縣にして、造陽は卽ち其地なり。

其後冬、匈奴の軍臣單于死す。軍臣單于の弟左谷蠡王伊稚斜、自立して單于と爲り、攻めて軍臣單于の太子於單を破る。於單亡げて漢に降る。漢、於單を封じて涉安侯と爲す。數月にして死す。

單于。攻破軍臣單于太子於單。於單亡降漢。漢封於單爲涉安侯。數月而死。

伊稚斜單于旣立。其夏。匈奴數萬騎入殺代郡太守恭及。略千餘人。其秋。匈奴又入雁門。殺略千餘人。其明年。匈奴又復入代郡。定襄。上郡。各三萬騎。殺略數千人。匈奴右賢王怨漢奪之河南地而築朔方。數

1伊稚斜。斜は音ヤ。一音サ。胡人の語を音譯したるなり。

伊稚斜單于旣に立ち、其夏、匈奴の數萬騎入りて代郡の太守恭及を殺し、千餘人を略す。其秋、匈奴、又、雁門に入り、千餘人を殺略す。其明年、匈奴、又復た代郡・定襄・上郡に入ること、各〻三萬騎、數千人を殺略す。匈奴の右賢王、漢の之が河南の地を奪ひて朔方に築きしを怨み、數〻寇を爲し邊に盜し、及び河南に入り、朔方を侵擾し、吏民を殺略すること甚だ衆し。

1恭及は當に恭友に作るべし。名臣表・衞將軍傳、並に太守友に作る。漢書匈奴傳には共友に作る。徐廣・顏師古・司馬貞、皆云ふ、「友は太守の名、共は其姓なり」と。2其秋、匈奴又雁門に入る。漢書武帝紀に據れば、雁門に入るも亦夏に在り。3其明年。元朔四年なり。4定襄。漢の郡の名。今の山西省右玉縣以北、綏遠省及び蒙古の喀爾喀右翼四子部落に至るまでの地なり。成樂に治す。卽ち今

爲寇盜邊。及入河南。侵擾朔方。殺略吏民甚衆。

其明年春。漢以衞青爲大將軍。將六將軍十餘萬人。出朔方高闕擊胡。右賢王以爲漢兵不能至。飲酒醉。漢兵出塞六七百里。夜圍右賢王。右賢王大驚。脫身逃走。諸精騎往往隨後去。漢得右賢王衆男女萬五千人。裨小王十餘人。

の和林格爾縣なり。

[1]其明年春、漢、衞青を以て大[2]將軍と爲し、六將軍・十餘萬人を將ゐ、朔方の高闕[3]より出でて胡を擊たしむ。右賢王以爲へらく、漢の兵、至る能はじと。酒を飲みて醉ふ。漢の兵、塞を出づること六七百里、夜、右賢王を圍む。右賢王大に驚き、身を脫して逃走す。諸の精騎、往往、後に[4]隨ひて去る。漢、右賢王の衆男女萬五千人・裨[5]小王十餘人を得たり。

1其明年。元朔五年なり。2大將軍。梁玉繩曰はく、『大將軍は乃ち車騎將軍の誤なり』と。3高闕。塞の名、陰山の西・蒙古鄂爾多斯の右翼・黃河の外騰格里湖の東北に在り。4後に隨ひて去る。右賢王の後に隨つて逃げ去る。5裨小王。附屬部落の小王なり。

其秋。匈奴萬騎入殺代郡都尉朱英。略千餘人。其明年春。漢復遣大將軍衞青。將六將軍兵十餘萬騎。乃再出定襄數百里擊匈奴。得首虜前後凡萬九千餘級。而漢亦亡兩將軍軍三千餘騎。右將軍建得以身脫。而前將軍翕侯趙信兵不利。降匈奴。

趙信者。故胡小王。降漢。漢封爲翕侯。

其秋、匈奴の萬騎入りて代郡の都尉朱英を殺し、千餘人を略す。[1]其明年春、漢復た大將軍衞青を遣はし、六將軍の兵十餘萬騎を將ゐしむ。乃ち再び定襄を出づること數百里にして、匈奴を擊つ。首虜を得ること、前後凡そ萬九千餘級。而して漢も亦、兩將軍の軍三千餘騎を亡ふ。右將軍[2]建は、身を以て脫するを得たり。而して前將軍翕侯趙信の兵は利あらず、匈奴に降れり。

1其明年。元朔六年なり。2建は蘇建なり。蘇武の父なり。

趙信は、故、胡の小王にして、漢に降る。漢、封じて翕侯と爲す。前將軍を以て、右將軍と軍を并せて分れ行き、[1]獨り單于の兵に遇ふ。故に盡

以前將軍與右將軍幷軍分行。獨遇單于兵。故盡沒。單于既得翁侯。以爲自次王。用其姊妻之。與謀漢。信教單于。益北絕幕。以誘罷漢兵。徼極而取之。無近塞。單于從其計。

其明年。胡騎萬人入上谷。殺數百人。其明年春。漢使驃騎將軍去病。將萬騎出隴西。過焉支山千餘里。

く沒せり。單于既に翁侯を得、以て自次王と爲し、其姉を用つて之に妻はせ、與に漢を謀る。信、單于に教ふ、『益〻北して幕を絕り、以て漢の兵を誘ひ罷らし、極を徼つて之を取れ。塞に近づく無かれ』と。單于、其計に從ふ。

1分れ行く。大軍と別れて行くなり。2自次王。尊重なること單于に次ぐ王の義なり。3幕は沙漠なり。絕は直に度るなり。4極を徼つて之を取れ。漢の兵の疲るること極まるを待つて之を擊つべし。5塞に近づく無かれ。塞に近づきて居らざるは、漢の兵を疲勞せしむる所以なり。

[1]其明年、胡騎萬人、上谷に入り、數百人を殺す。[2]其明年春、漢、驃騎將軍去病をして、萬騎を將ゐて、隴西より出でしむ。焉支山を過ぐること千餘里、匈奴を擊つ。胡の首虜騎萬八千餘級を得、破りて休屠王が天を祭る金人を得たり。

1其明年。元狩元年夏なり。2其明年春。元狩二年なり。3焉支山。山の名、一

擊匈奴。得胡首虜騎萬八千餘級。破得休屠王祭天金人。

其夏。驃騎將軍。復與合騎侯。數萬騎。出隴西北地二千里。擊匈奴。過居延。攻祁連山。得胡首虜三萬餘人。裨小王以下七十餘人。

名、刪丹山、大黃山。今の甘肅省山丹縣の東南五十里に在り。西河故事に云ふ、『匈奴、祁連・焉支の二山を失ひ、乃ち歌つて曰はく、「我が祁連山を亡ひ、我が六畜をして蕃息せざらしむ。我が焉支山を失ひ、我が婦女をして顏色無からしむ」と。其の愍惜すること乃ち此の如し』と。4胡の首虜騎萬八千級を得。騎萬の二字は衍文なるべし。驃騎傳には無し。漢書匈奴傳にも亦無し。5破りて。此字は恐らくは衍文ならん。6休屠王。匈奴の屬王の號。今の甘肅省甘涼道の東部は、漢初に匈奴の休屠王の地と爲す。後、漢、休屠縣を置く。故城は武威縣の北に在り。天を祭る金人。天を祭るに主と爲す所の金屬製の像なり。卽ち今の佛像なりといふ。

其夏、驃騎將軍、復た合騎侯と與に、數萬騎、隴西・北地を出づること二千里、匈奴を擊つ。[1]居延を過ぎ、[2]祁連山を攻め、胡の首虜三萬餘人・裨小王以下七十餘人を得たり。

1居延。地名、亦、湖の名。今の甘肅省酒泉邊外蒙古額濟納旗に在り。2祁連山。山の名。一名、天山、白山。西河舊事に云ふ、『山は張掖・酒泉の二界上に在り。東西二百餘里、南北百里、松柏五木・美なる水草有り。冬溫に夏涼しく、畜の牧養に宜し』と。

是時匈奴亦來入代郡雁門。殺略數百人。漢使博望侯及李將軍廣出右北平。擊匈奴左賢王。左賢王圍李將軍。卒可四千人。且盡。殺虜亦過當。會博望侯軍救至。李將軍得脫。漢失亡數千人。合騎侯後驃騎將軍期。及與博望侯皆當死。贖爲庶人。

是の時、匈奴も亦來りて代郡・雁門に入り、數百人を殺略す。漢、博望侯及び李將軍廣をして、右北平より出で、匈奴の左賢王を擊たしむ。左賢王、李將軍を圍む。卒、四千人可り、且に盡きんとす。殺虜すること亦過當なり。會と博望侯の軍救ひ至る。李將軍、脫するを得たり。漢、數千人を失亡す。合騎侯、驃騎將軍の期に後れ、及び博望侯と、皆、死に當す。贖うて庶人と爲る。

1左賢王、李將軍を圍む。李將軍傳に詳かなり。2卒。李將軍の部下の士卒なり。3過當。相當數を過ぐるなり。敵を殺虜すること、味方の損失よりも多きをいふ。

其秋。單于怒渾邪王休屠王居西方。爲漢所殺虜數萬人。欲召誅之。渾邪王與休屠王恐。謀降漢。漢使驃騎將軍往迎之。渾邪王殺休屠王。幷將其衆降漢。凡四萬餘人。號十萬。

其秋、單于、渾邪王・休屠王が西方に居り・漢に殺虜せらるること數萬人なるを怒り、召して之を誅せんと欲す。渾邪王、休屠王と與に恐れ、漢に降らんと謀る。漢、驃騎將軍をして往きて之を迎へしむ。渾邪王、休屠王を殺し、其衆を幷せ將ゐて漢に降る。凡そ四萬餘人。十萬と號す。

1渾邪王。匈奴の屬王の號。今の甘肅省舊甘州・肅州の地は、漢初に匈奴の渾邪王の地と爲す。亦、昆邪に作る。

於是漢已得渾邪王。則隴西北地河西益少胡寇。徙關東貧民。處所奪匈奴河南新秦中。以實之。而減北地以西戍卒半。

是に於て、漢已に渾邪王を得、則ち隴西・北地・河西益ゝ胡の寇少し。關東の貧民を徙して、奪ふ所の匈奴の河南・新秦中の地に處らしめ、以て之を實て、而して北地以西の戍卒の半を減ず。

1新秦中。地名。秦の始皇、匈奴を逐ひ、河南の地を收め、城郭を築き、民を徙して之に居らしめ、新秦中と名づく。漢は朔方郡と爲す。卽ち今の內蒙古鄂爾多斯の地なり。

其明年。匈奴入右北平定襄。各數萬騎。殺略千餘人而去。

其明年、匈奴、右北平・定襄に入ること、各〻數萬騎、千餘人を殺略して去る。

1其明年。元狩三年なり。

其明年春。漢謀曰。翕侯信爲單于計。居幕北。以爲漢兵不能至。乃粟馬發十萬騎。負私從馬凡十四萬匹。糧重不與焉。令大將軍青。驃騎將軍去病中分軍。大將軍出定襄。驃騎將軍出代。咸約絕幕擊匈奴。

1其明年春、漢謀りて曰はく、『翕侯信、單于の爲めに計り、幕[2]北に居り、漢の兵は至る能はずと以爲へり』と。乃ち馬[3]に粟し、十萬騎を發す。負[4]私從馬、凡そ十四萬匹、糧重[5]は與からず。大將軍青・驃騎將軍去病をして軍を中分[6]せしむ。大將軍は定襄より出で、驃騎將軍は代より出づ。咸約すらく、幕[7]を絕りて匈奴を擊たんと。

1其明年春。元狩四年なり。2幕北。沙漠の北なり。3馬に粟す。馬に粟を食はするなり。4負私從馬。私物を背負うて從ふ馬なり。王念孫曰はく、『案ずるに負私從馬は、文、義を成さず。當に漢書に依りて私負從馬に作るべし。寫す者誤つて倒にするのみ。負從馬は、衣裝を負うて以て從ふの馬なり。公家の發する所に非ず、故に私負從馬と曰ふ』と。5糧重は與からず。糧食輜重の馬は此中に含まず。6中分。二分するなり。7幕を絕りて匈奴を擊たん。沙漠を橫斷して匈奴の單于を擊たんと期するなり。

匈奴單于聞之。遠其輜重。以精兵待於幕北。與漢大將軍接戰一日。會暮大風起。漢兵縱左右翼圍單于。單于自度戰不能如漢兵。單于遂獨身與壯騎數百潰漢圍。西北遁走。漢兵夜追。不得。行斬捕匈奴首虜萬九千級。北至闐顏山趙信城而還。

匈奴の單于、之を聞き、其[1]輜重を遠ざけ、精兵を以て幕北に待つ。漢の大將軍と接戰すること一日。會と暮れ、大風起る。漢の兵、左右の翼を縱ちて單于を圍む。單于自ら度る、戰、漢の兵に如く能はずと。單于遂に獨身にして、壯騎數百と與に、漢の圍を潰し、西北に遁走す。漢[2]の兵、夜追ふ。得ず。行くゆく匈奴の首虜を斬捕すること、萬九千級、北のかた闐顏[3]山の趙信城に至りて還る。

1其輜重を遠ざく。其輜重を徙して遠く避けしむるなり。2漢の兵、夜追ふ。得ず。漢の兵、夜、單于を追へども、之を得ざるなり。3闐顏山。山の名。外蒙古に在り。漢書には寘顏山に作る。趙信城は、趙信の作る所なり、因つて以て城に名づく。

單于之遁走。其兵往往與漢兵相亂而隨單于。久之。其大衆與相得。其右谷蠡王以爲單于死。

單于の遁走するや、其兵、往往にして漢の兵と相亂れて、單于に隨ふ。單于、久しく・其大衆と相得ず。其右谷蠡王以爲へらく單于死せりと。

于。單于久不與其大衆相得。其右谷蠡王以爲單于死。乃自立爲單于。眞單于復得其衆。而右谷蠡王乃去其單于號。復爲右谷蠡王。

乃ち自立して單于と爲る。眞の單于、復た其衆を得。而して右谷蠡王乃ち其單于の號を去て、復た右谷蠡王と爲る。

1單于久しく其大衆と相得ず。單于は久しく其部下の大部隊と合ふことを得ず。

漢驃騎將軍之出代二千餘里。與左賢王接戰。漢兵得胡首虜凡七萬餘級。左賢王將皆遁走。驃騎封於狼居胥山。禪姑衍。臨翰海而還。

漢の驃騎將軍の・代より出づるや、二千餘里にして、左賢王と接戰す。漢の兵、胡の首虜を得ること凡そ七萬餘級。左賢王の將皆遁走す。驃騎、狼居胥山に封じ、姑衍に禪し、瀚海に臨みて還る。

1狼居胥山は山名なれども、所在未だ詳かならず。封は祭の名。山の上に土を盛り上げて壇を爲りて天を祭るなり。2姑衍。山の名なるべきも、所在未だ詳かならず。禪は祭の名。小山の上に地を掃ひて地の神を祭るなり。3瀚海。蒙古の沙漠の西北部、特にコビ沙漠をいふ。一說に、バイカル湖なりとも曰ふ。

是後匈奴遠遁。而幕南無王庭。漢度河。自朔方以西至令居。往往通渠置田官。吏卒五六萬人。稍蠶食。地接匈奴以北。

是の後、匈奴遠く遁れて、幕南に王庭無し。漢、河を度り、朔方より以西、令居に至るまで、往往、渠を通じ、田官を置く。吏卒五六萬人。稍く蠶食して、地、匈奴以北に接す。

1幕南に王庭無し。沙漠の南に匈奴の王の都無し。2令居。縣の名。故城は今の甘肅省平番縣の西北に在り。3渠。灌漑の溝渠なり。4田官。田地を監督する官なり。5稍く蠶食して云云。匈奴、舊、幕を以て王庭と爲す。今、遠く漠北に徙る。更に之を蠶食し、漢の境、匈奴の舊地以北に連接するなり。

初漢兩將軍大出圍單于。所殺虜八九萬。而漢士卒物故亦數萬。漢馬死者十餘萬。匈奴雖病遠去。而漢亦馬少。無以復往。

初め漢の兩將軍、大に出でて單于を圍むや、殺虜する所八九萬、而して漢の士卒の物故するものも亦數萬、漢の馬の死する者十餘萬なり。匈奴、病みて遠く去ると雖も、而も漢も亦馬少く、以て復た往く無し。

1物故。死するなり。

匈奴用趙信之計。遣匈奴、趙信の計を用ひ、使を漢に遣はし、辭を好くして和親を請ふ。天

使於漢。好辭請和親。天子下其議。或言和親。或言遂臣之。丞相長史任敞曰。匈奴新破困。宜可使爲外臣。朝請於邊。漢使任敞於單于。單于聞敞計大怒。留之不遣。先是漢亦有所降匈奴使者。單于亦輒留漢使相當。

漢方復收士馬。會驃騎將軍去病死。於是漢久不北擊胡。

子、其議を下す。或は言ふ、『和親せん』と。或は言ふ、『遂に之を臣とせん』と。丞相の長史任敞曰はく、『匈奴は新に破れて困しめり。宜しく外臣と爲して邊に朝請せしむ可し』と。漢、任敞を單于に使す。單于、敞の計を聞き、大に怒り、之を留めて遣らず。是れより先、漢にも亦、降れる所の匈奴の使者有り。單于も亦輒ち漢の使を留めて相當る。

1辭を好くして和親を請ふ。言辭を飾りて、和親せんことを請ふ。2宜しく外臣と爲して邊に朝請せしむ可し。宜しく單于を外國服屬の臣とし、歲時に邊境に於て朝請の禮を行はしむ可し。3相當る。漢と同樣の事を爲して對抗するなり。

漢方に復た士馬を收む。會〻驃騎將軍去病・死す。是に於て、漢、久しく・北のかた胡を擊たず。

1士馬を收む。軍士及び戰馬を徵集す。2驃騎將軍去病死す。元狩六年、霍去病・死す。

數歲。伊稚斜單于立十三年死。子烏維立爲單于。是歲漢元鼎三年也。

烏維單于立。而漢天子始出巡郡縣。其後漢方南誅兩越。不擊匈奴。匈奴亦不侵入邊。

烏維單于立三年。漢已滅南越。遣故太僕

數歲にして、伊稚斜單于立ちて十三年にして死す。子烏維立ちて單于と爲る。是の歲は、漢の元鼎三年なり。

1十三年。伊稚斜は元朔三年立ちて單于と爲り、元鼎三年死す。

烏維單于立つ。而して漢の天子始めて出でて郡縣を巡る。其後、漢方に南のかた兩越を誅し、匈奴を擊たず。匈奴も亦邊に侵入せず。

1兩越。南越と東越となり。2匈奴も亦邊に侵入せず。匈奴も亦漢の邊境に侵入らず。梁玉繩曰はく、『案ずるに、武紀に、元鼎五年、西羌の衆十萬人反し、匈奴と使を通じ、固安を攻め、枹罕を圍む。匈奴、五原に入り、太守を殺す。正に是の時に在り。何ぞ侵入せずと言ふや』と。

烏維單于立ちて三年にして、漢已に南越を滅ぼす。故の太僕賀を遣はし、萬五千騎を將ゐて、九原を出づること二千餘里、浮苴井に至りて還

賀將萬五千騎。出九原二千餘里。至浮苴井而還。不見匈奴一人。

漢又遣故從驃侯趙破奴。萬餘騎出令居數千里。至匈奴河水而還。亦不見匈奴一人。

是時天子巡邊至朔方。勒兵十八萬騎。以見武節。而使郭吉風告單于。郭吉既至匈奴。匈奴主客問所

る。匈奴一人をも見ず。

1漢已に南越を滅ぼす。漢書武帝紀に據れば、南越を滅ぼすは、元鼎六年春に在り。2故の太僕賀を遣はす。元鼎六年秋に在り。賀は公孫賀なり。3浮苴井。井の名、匈奴の中に在り。

漢、又、故の從驃侯趙破奴を遣はし、萬餘騎をもて令居を出づること數千里、匈[1]奴河水に至りて還る。亦、匈奴一人をも見ず。

1匈奴河水。奴の字は衍文なり。

是の時、天子、邊を巡りて朔方に至り、兵十八萬騎を勒し、以て武[2]節を見し、而して郭吉をして單于に風[3]告せしむ。郭吉既に匈奴に至る。匈奴の主客、[4]使する所を問ふ。郭吉、禮[5]卑しく言好くして曰はく、『吾、單于に見えて口づから言はん』と。

1勒。檢閱するなり。2武節を見す。武威の盛にして節度あるを示すなり。3風告。諷告と同じ。それと無く諭し告ぐるなり。4主客。外國の使臣賓客を主る官なり。使する所を問ふとは、使者として來れる趣意を問ふなり。5禮卑しく言好くす。禮儀を丁寧にし言葉を巧妙にす。

使。郭吉禮卑言好曰。吾見單于而口言。

單于見吉。吉曰。南越王頭已懸於漢北闕。今單于能。卽前與漢戰。天子自將兵待邊。單于卽不能。卽南面而臣於漢。何徒遠走。亡匿於幕北寒苦無水草之地。毋爲也。語卒。而單于大怒。立斬主客見者。而留郭吉不歸。遷之北海上。而單于終不肯爲寇於

單于、吉を見る。吉曰はく、『南越王の頭は、已に漢の北闕に懸れり。今、單于能くせば、卽ち前みて漢と戰へ。天子自ら兵を將ゐて邊に待つ。單于、卽し能くせずんば、卽ち南[1]面して漢に臣たれ。何ぞ徒らに遠く走りて、幕北の寒苦にして水草無きの地に亡匿[2]する。爲す毋かれなり』と。語卒りて、單于大に怒り、立ちどころに主客の見[3]えしめし者を斬り、而して郭吉を留めて歸さず、之を北海の上に遷す。而れども單于、終に肯て寇を漢の邊に爲さず、休養して士馬を息め、射獵を習はす。數〻使を漢に使はし、辭[5]を好くし言を甘くし、和親を求請す。

1南面。南のかた漢に向ふなり。2亡匿。にげ、かくる。匿は音デヨク、一音トク。3主客の見えしめし者。主客の官の、郭吉をして單于に謁見せしめし者なり。4北海。貝加爾湖なりといふ。5辭を好くし言を甘くす。言葉巧みに人の氣に入るやうな事を言ふなり。

漢邊。休養息士馬。習射獵。數使使於漢。好辭甘言。求請和親。

漢使王烏等窺匈奴。匈奴法。漢使非去節而以墨黥其面者。不得入穹廬。王烏北地人。習胡俗。去其節黥面。得入穹廬。單于愛之。詳許甘言。爲遣其太子。入漢爲質。以求和親。

漢、王烏等をして匈奴を窺はしむ。匈奴の法に、漢の使、節[1]を去てて墨を以て其面に黥する者に非ざれば、穹廬[2]に入るを得ず。王烏は北地の人にして、胡の俗[3]に習へり。其節を去て面に黥し、穹廬に入るを得たり。單于、之を愛す。詳[4]りて許して甘言し、爲めに其太子を遣はして漢に入りて質と爲し、以て和親を求めんといふ。

1 節は使者の持つところの信節なり。墨を以て其面に黥すとは、顔面に入れ墨するなり。2 穹廬。單于の氈帳をいふ。3 俗は風俗なり。4 詳は佯と通ず。甘言は人の耳を悅ばしむる、うまい言葉なり。

漢使楊信於匈奴。是時漢、東のかた穢貉・朝鮮を拔きて以

時漢東拔穢貉朝鮮以爲郡。而西至酒泉郡。以鬲絕胡與羌通之路。漢又西通月氏大夏。又以公主妻烏孫王。以分匈奴西方之援國。又北益廣田。至肱䪥爲塞。而匈奴終不敢以爲言。是歲翕侯信死。漢用事者。以匈奴爲已弱。可臣從也。楊信爲人剛直屈彊。素非貴臣。單于不親。單于欲召入。不肯去節。單于乃坐

て郡[1]と爲し、而して西[2]のかた酒泉郡に至り、以て胡と羌と通ずるの路を鬲[3]絕す。漢、又、西のかた月氏・大夏[4]に通じ、又、公主を以て烏孫王に妻はし、以て匈奴の西方の援國を分ち、又、北のかた田を益し廣くし、肱䪥[5]に至りて塞を爲す。而るに匈奴、終に・敢て以て言を爲さず。是の歲、翕侯信・死す。漢の・事を用ふる者、匈奴を以て、已に弱くして・臣とし從ふ可しと爲すなり。楊信は、人と爲り剛直屈彊[6]にして、素、貴臣に非ず。單于、親しまず。單于、召し入れんと欲すれども、肯て節を去てず。單于乃ち穹廬の外に坐し、楊信を見る。

1 郡。卽ち玄菟・樂浪の二郡なり。2 西のかた酒泉郡に至り。當に『西のかた酒泉郡を置き』に作るべし。酒泉郡の故城は、今の甘肅省酒泉縣の東北に在り。3 鬲絕。隔絕と同じ。4 大夏。西域の古國の名。今のアフガニスタンの北部の地、アム河の南に在り。西洋史にはバクトリヤと稱す。5 肱䪥。漢書には肱雷に作る。服虔曰はく、『地、烏孫の北に在り』と。齊召南曰はく、『案ずるに地理志に、西河郡增山縣に道有り、西のかた肱雷塞に出づ。北部都尉治す。則ち肱雷塞は、西河郡の西北邊に在り、遠く烏孫國に在るを得ざるなり』と。6 屈彊。倔强と同じ。屈抑を受けざるなり。

穹廬外見楊信。

楊信既見單于。說曰。卽欲和親。以單于太子爲質於漢。單于曰。非故約。故約。漢常遣公主。給繒絮食物有品。以和親。而匈奴亦不擾邊。今乃欲反古。令吾太子爲質。無幾矣。

楊信既に單于に見え、說きて曰はく、『卽し和親せんと欲せば、單于の太子を以て漢に質と爲せ』と。單于曰はく、『故の約に非ず。故の約は、漢常に公主を遣はし、繒絮食物を給すること品有り、以て和親し、而して匈奴も亦、邊を擾さず。今乃ち古に反し吾が太子をして質と爲さしめんと欲するは、幾ふ無し』と。

匈奴俗。見漢使非中貴人。其儒先。以爲欲說折其辯。其少年。

匈奴の俗、漢の使の・中貴人に非ざるを見れば、其の儒先なるは、說かんと欲すと以爲ひて其辯を折き、其の少年なるは、刺さんと欲すと以爲ひて其氣を折く。漢の使の・匈奴に入る每に、匈奴輒ち報償す。漢、匈

1品有りとは、品目多きをいふ。2古に反す。舊の約束に違ふなり。3幾ふ無し。我が冀望する所に非ず。

1中貴人。內臣の貴幸せらるる者をいふ。2儒先。先は先生なり。儒者先生なり。漢書には儒生に作る。

以爲欲刺。折其氣。每漢使入匈奴。匈奴輒報償。漢留匈奴使。匈奴亦留漢使。必得當。乃肯止。

奴の使を留むれば、匈奴も亦漢の使を留め、必ず・當るを得て、乃ち肯て止む。

楊信既歸。漢使王烏。而單于復謾以甘言。欲多得漢財物。紿謂王烏曰。吾欲入漢見天子。面相約爲兄弟。

楊信既に歸る。漢、王烏を使とす。而して單于復た謾ふに甘言を以て し、多く漢の財物を得んと欲し、紿きて王烏に謂つて曰はく、『吾は、漢に入りて天子に見え・面のあたり相約して兄弟と爲らんと欲す』と。

王烏歸報漢。漢爲單于築邸于長安。匈奴曰。非得漢貴人使。王烏歸りて漢に報ず。漢、單于の爲めに、邸を長安に築く。匈奴曰はく、『漢の貴人の使を得るに非ずんば、吾、與に誠語せじ』と。

1謾。詔の古字なり。2紿。詐るなり。

1誠語。眞實の事を語るなり。

吾不與誠語。

匈奴使其貴人至漢。病。漢予藥。欲愈之。不幸而死。而漢使路充國佩二千石印綬往使。因送其喪。厚葬直數千金。曰此漢貴人也。單于以爲漢殺吾貴使者。乃留路充國不歸。諸所言者。單于特空紿王烏。殊無意入漢及遣太子來質。

匈奴、其貴人をして漢に至らしむ。病む。漢、藥を予へ、之を愈さんと欲す。不幸にして死す。而して漢、路充國をして、二千石の印綬を佩びて往きて使せしめ、因つて其喪を送る。厚葬、數千金に直る。曰はく、『此れ漢の貴人なり』と。單于以爲へらく、漢、吾が貴使者を殺せりと。乃ち路充國を留めて・歸さず。諸の言ひし所の者は、單于特に空しく王烏を紿きしものにして、殊えて・漢に入り及び太子を遣はして來りて質たらしむるに意無し。

1匈奴、其貴人をして漢に至らしむくして遂に臣服す可しと以ひ、迺ち使を遣はして之に詔す。單于の使來り、京師に死す、と曰へるは、卽ち此事なり。2厚葬。鄭重なる葬儀。3特は但なり。

於是匈奴數使奇兵侵犯邊。漢乃拜郭昌爲拔胡將軍。及浞野侯屯朔方以東。備胡。

是に於て、匈奴數奇兵をして邊を侵犯せしむ。漢乃ち郭昌を拜して拔胡將軍と爲し、及び浞野侯、朔方以東に屯して胡に備ふ。

1浞野侯。趙破奴なり。

路充國留匈奴三歲。單于死。烏維單于立。十歲而死。子烏師廬立爲單于。年少。號爲兒單于。是歲元封六年也。自此之後。單于益西北。左方兵直雲中。右方直酒泉敦煌郡。

路充國、匈奴に留まること三歲にして、單于死す。烏維單于立ちて十歲にして死す。子烏師廬立ちて單于と爲る。年少し。號して兒單于と爲す。是の歲は元封六年なり。此れよりの後、單于益ゝ西北し、左方の兵は雲中に直り、右方は酒泉・敦煌郡に直る。

1烏師廬。漢書には詹師廬に作る。2單于益ゝ西北す。單于ます〳〵西北方に從るなり。下文に言ふ所卽ち是れなり。從來、「單于、西北を益し」と讀み、單于、兵を西北に益すと解するは、誤讀なり。3敦煌。漢の郡の名。今の甘肅省敦煌縣に治す。

兒單于立。漢使兩使者。一弔單于。一弔右賢王。欲以乖其國。使者入匈奴。匈奴悉將致單于。單于怒而盡留漢使。漢使留匈奴者。前後十餘輩。而匈奴使來。漢亦輒留相當。

兒單于立つや、漢、兩使者を使とし、一は單于を弔し、一は右賢王を弔し、[1]以て其國を乖かしめんと欲す。使者、匈奴に入る。匈[2]奴悉く將ゐて單于に致す。單于怒りて盡く漢の使を留む。漢の使、匈奴に留まる者、前後十餘輩なり。而して匈奴の使來れば、漢も亦輒ち留めて相當る。

1以て其國を乖かしめんと欲す。單于と右賢王とを同等に取扱ひ、匈奴の君臣をして相疑はしめんと欲するなり。2匈奴悉く將ゐて單于に致す。匈奴は、二人の使者を將ゐて皆之を單于に差出すなり。

是歲漢使貳師將軍廣利西伐大宛。而令因杅將軍敖築受降城。

是[1]の歲、漢、貳師將軍廣利をして、西のかた大宛[2]を伐たしめ、而して因杅[3]將軍敖をして、受降城を築かしむ。

1是の歲。王先謙曰はく、『太初元年なり』と。2大宛。今の中央亞細亞のフェルガナ州。3因杅將軍。因杅は地名。地名を以て將軍の號と爲す。敖は公孫敖なり。4受降城。今の蒙古の烏喇特族の北に在り。

其冬。匈奴大雨雪。畜多饑寒死。兒單于年少。好殺伐。國人多不安。左大都尉欲殺單于。使人閒告漢曰。我欲殺單于降漢。漢遠。卽兵來迎我。我卽發。初漢聞此言。故築受降城。猶以爲遠。其明年春。漢使浞野侯破奴將二萬餘騎。出朔方西北二千餘里。期至浚稽山而還。浞野侯旣至期而還。

其冬、匈奴大[1]に雪雨り、畜多く饑ゑ寒えて死す。兒單于は年少く、殺伐を好む。國人、多く・安んぜず。左大都尉、單于を殺さんと欲す。人をして閒に漢に告げしめて曰はく、『我、單于を殺して漢に降らんと欲す。漢は遠し。卽し兵來りて我を迎へば、我卽ち發せん』と。初め漢、此言を聞く。故に受降城を築く。猶ほ以て遠しと爲す。其明年春、漢、浞野侯破奴をして、二萬餘騎を將ゐ、朔方の西に出でしむること二千餘里。浚稽[2]山に至りて還るを期す。

1其明年春。王先謙曰はく『太初二年なり』と。2浚稽山。山の名。外蒙古喀爾喀の境に在り。

浞野侯旣[1]に期に至りて還る。左大都尉、發せんと欲して覺はる。單于、

左大都尉欲發而覺。單于誅之。發左方兵擊浞野。浞野侯行捕首虜數千人還。未至受降城四百里。匈奴兵八萬騎圍之。浞野侯夜自出求水。匈奴閒捕生得浞野侯。因急擊其軍。軍中郭縱爲護。維王爲渠。相與謀曰。及諸校尉。畏亡將軍而誅之。莫相勸歸。軍遂沒於匈奴。匈奴兒單于大喜。遂遣奇兵攻受降城。不

之を誅し、左方の兵を發して浞野を擊つ。浞野侯、行くゆく首虜數千人を捕へて還る。未だ受降城に至らざること四百里、匈奴の兵八萬騎、之を圍む。浞野侯、夜自ら出でて水を求む。匈奴、閒に捕へて浞野侯を生得し、因つて急に其軍を擊つ。[1]軍中、郭縱、護と爲り、維王、渠と爲り、相與に謀りて曰はく、『諸校尉に及ぶまで、將軍を亡ひたれば之を誅せられんことを畏る』と。相勸めて歸る莫く、軍遂に匈奴に沒す。匈奴の兒單于大に喜び、遂に奇兵を遣はして受降城を攻めしむ。下す能はず。乃ち寇して邊に入りて去る。其明年、單于、自ら受降城を攻めんと欲し、未だ至らず、病みて死す。兒單于立ちて三歲にして死す。子、年少し。匈奴乃ち其季父烏維單于の弟右賢王呴犂湖を立てて單于と爲す。是の歲は太初三年なり。

1 軍中、郭縱、護と爲り、維王、渠と爲り、相與に謀りて曰はく、諸校尉に及ぶまで、將軍を亡ひたれば之を誅せられんことを畏ると。相勸めて歸る莫く、軍遂に匈奴に沒す。護は護軍なり。渠は渠帥なり。此數句、讀む可からず。必ず脫誤あらん。漢書には、『軍吏、將を亡ひて誅せられんことを畏れ、相勸めて歸る莫く、軍遂に匈奴に沒す』に作る。軍法に、將を亡うて遁れ歸る者は、之を誅す。2 呴犂湖。漢書には句黎湖に作る。

能下。乃寇入邊而去。其明年。單于欲自攻受降城。未至。病死。兒單于立三歲而死。子年少。匈奴乃立其季父烏維單于弟右賢王呴犂湖爲單于。是歲太初三年也。

呴犂湖單于立。漢使光祿徐自爲出五原塞數百里。遠者千餘里。築城鄣列亭。至盧朐。而使游擊將軍韓說。長平侯衞伉屯其旁。

呴犂湖單于立つ。漢、光祿徐自爲をして、[1]五原の塞を出づること數百里、遠きは千餘里、城鄣列亭を築き、盧朐に至らしむ。而して游擊將軍韓說・長平侯衞伉をして其旁に屯せしめ、彊弩校尉路博德をして居延澤の上に築かしむ。其秋、匈奴大に定襄・雲中に入り、數千人を殺略し、數二千石を敗りて去る。行くゆく光祿の築く所の城列亭鄣を破壞す。又、右賢王をして酒泉・張掖に入りて、數千人を略せしむ。會と任文擊ちて救

使彊弩都尉路博德築居延澤上。其秋。匈奴大入定襄雲中。殺略數千人。敗數二千石而去。行破壞光祿所築城列亭鄣。又使右賢王入酒泉張掖。略數千人。會任文擊救。盡復失所得而去。是歳。貳師將軍破大宛。斬其王而還。匈奴欲遮之。不能至。其冬。欲攻受降城。會單于病死。呴犂湖單于立一歳死。匈奴ふ。盡く復た・得る所を失うて去る。是の時、貳師將軍、[9]大宛を破り、其王を斬りて還る。匈奴、之を遮らんと欲し、至る能はず。其冬、受降城を攻めんと欲す。會と單于病みて死す。呴犂湖單于立ちて一歳にして死す。匈奴乃ち其弟左大都尉且鞮侯を立てて單于と爲す。

1五原の塞。卽ち榆林塞なり。今の蒙古鄂爾多斯の黃河の北岸に在り。2鄣は山中の小城なり。亭は候望の居る所なり。列亭は亭を數多く列ね建てたるなり。3盧朐。匈奴の地名、又、山の名。4衞伉。衞青の子なり。5居延澤。亦、居延海と曰ふ。今の蒙古額濟納旗の東北境に在る鹹湖なり。6數二千石。二千石の大官數人。7城列亭鄣。城鄣列亭の誤倒なるべし。8任文は漢の將なり。擊ちて救ふとは、匈奴を擊ちて漢人を救ふなり。漢書西域傳に據れば、時に軍正任文、兵を將ゐて玉門關に屯す、故に酒泉・張掖を救ふを得たるなり。9大宛を破る。事は太初四年に在り。

乃立其弟左大都尉且鞮侯爲單于。

漢既誅大宛。威震外國。天子意欲遂困胡。乃下詔曰。高皇帝遺朕平城之憂。高后時。單于書絕悖逆。昔齊襄公復百世之讎。春秋大之。是歳太初四年也。

且鞮侯單于既立。盡歸漢使之不降者。路充國等得歸。單于初漢既に大宛を誅し、威、外國に振ふ。天子、意に・遂に胡を困しめんと欲す。乃ち詔を下して曰はく、『高皇帝、朕に平城の憂を遺せり。高后の時、單于の書絕だ悖逆なりき。昔、齊の襄公、百世の讎を復し、春秋、之を大とす』と。是の歳は太初四年なり。

1平城の憂を遺せり。平城に圍まれし怨を遺したり。2齊の襄公云云。百世は漢書には九世に作る。春秋は書名。春秋公羊傳に云ふ、『莊公四年春、齊の襄公、紀を滅ぼす。讎を復するなり。襄公の九世の祖、昔、紀侯に譖せられ、而して周に亨殺せらる。故に襄公、紀を滅ぼししなり。九世、猶ほ以て讎を復す可きか。曰はく、百世と雖も可なり』と。

且鞮侯單于既に立ち、盡く漢の使の降らざる者を歸す。路充國等、歸るを得たり。單于初めて立ち、漢の之を襲はんことを恐れ、乃ち自ら謂ふ、『我は兒子なり。安んぞ敢て漢の天子を望まん。漢の天子は、我が丈

立。恐漢襲之。乃自謂我兒子。安敢望漢天子。漢天子我丈人行也。漢遣中郎將蘇武。厚幣賂遺單于。單于益驕。禮甚倨。非漢所望也。

其明年。浞野侯破奴得亡歸漢。其明年。漢使貳師將軍廣利以三萬騎。出酒泉。擊右賢王於天山。得胡首

人行(じんかう)なり』と。漢、中郎將蘇武を遣はし、幣を厚くして單于に賂遺(ろゐ)す。單于益ゝ驕り、禮甚だ倨(おご)る。[3]漢の望む所に非ざるなり。

1 且鞮侯單于既に立ち云云。梁玉繩曰はく、『此下は乃ち後人の續ぐ所にして、史公の本書に非ず。其の載する所に至りても、亦、誤多し。單于が漢の使を歸し、蘇武が單于に使するが如きは、皆、天漢元年の事なり。而るに此れには誤りて太初四年に在り。匈奴が李陵に妻はすは、乃ち陵が降りて數歲の後の事なり。而るに此れには誤りて陵降るを以て卽ち之に妻はすとす。貳師が朔方に出づるとき步兵七萬人なり。而るに此れには誤りて十萬に作る。貳師、匈奴に降り、其家、巫蠱を以て族滅せらるるは、俱に征和四年の事なり。而るに此れには誤りて天漢四年に敍す。何ぞ信ずるに足らんや』と。2 丈人行。丈人は尊老の稱。行は輩行なり。父親と同じ年輩の人の意。3 漢の望む所に非ざるなり。漢の期望する所と異なり。

其明年、浞野侯破奴、亡げて漢に歸るを得たり。其明年、漢、貳師將軍廣利をして、三萬騎を以て、酒泉より出で、右賢王を天山に擊たしむ。胡の首虜萬餘級を得て還る。匈奴大に貳師將軍を圍む。幾ど脫せざらんとす。漢の兵の物故するもの什に六七なり。漢復た因杅將軍敖をして、西河より出で、彊弩都尉と與に、涿涂山に會せしむ。得る所毋し。又、騎

虜萬餘級而還。匈奴大圍貳師將軍。幾不脫。漢兵物故什六七。漢復使因杅將軍敖出西河。與彊弩都尉會涿涂山。毋所得。又使騎都尉李陵將步騎五千人。出居延北千餘里。與單于會。合戰。陵所殺傷萬餘人。兵及食盡。欲解歸。匈奴圍陵。降匈奴。其兵遂沒。得還者四百人。單于乃貴陵。以其女妻之。

都尉李陵をして、步騎五千を將(ひき)ゐて、居延の北に出でしむること千餘里。單于と會して合戰す。陵が殺傷する所萬餘人。[4]兵及び食盡き、解き歸らんと欲す。匈奴、陵を圍む。匈奴に降る。其兵遂(つひ)に沒す。還るを得たる者四百人なり。單于、陵を貴び、其女を以て之に妻(めあ)はす。

1 幾ど脫せざらんとす。廣利、脫るるを得ざらんとす。2 物故は死するをいふ。3 涿涂山。一に涿邪山とも曰ふ。外蒙古の西部に在り。4 兵及び食盡く。陵の兵士及び糧食盡くるなり。

後二歲。復使貳師將軍將六萬騎。步兵十萬。出朔方。彊弩都尉路博德。將萬餘人與貳師會。游擊將軍說。將步騎三萬人出五原。因杅將軍敖。將萬騎步兵三萬人出雁門。匈奴聞。悉遠其累重於余吾水北。而單于以十萬騎待水南。與貳師將軍接戰。貳師乃解而引歸。與單于連戰十餘日。貳師聞其家以巫蠱族

後二歲、復た貳師將軍をして、六萬騎・步兵十萬を將ゐて、朔方より出でしめ、彊弩都尉路博德をして、萬餘騎を將ゐて、貳師と會せしむ。游擊將軍說、步騎三萬人を將ゐて、五原より出で、因杅將軍敖、萬騎・步兵三萬人を將ゐて、雁門より出づ。匈奴聞き、悉く其累重を余吾水の北に遠ざけ、而して單于、十萬騎を以て、水南に待ち、貳師將軍と接戰す。貳師乃ち解きて引き歸る。單于と連戰すること十餘日、貳師、其家が巫蠱を以て族滅せられしを聞き、因つて衆を并せて匈奴に降る。來り還るを得たるは、千人に一兩人のみ。游擊說は得る所無し。因杅敖は左賢王と戰ひて利あらず、引き歸る。是の歲、漢の兵の出でて匈奴を擊つ者、功の多少を言ふを得ず、[4]功、御るを得ず。詔有り、大醫令隨但を捕ふ。貳師將軍の家室の族滅せらるるを言ひ、廣利をして匈奴に降るを得しめたればなり。

1累重。妻子資產を謂ふ。2余吾水。水の名、朔方の北に在り。3巫蠱。女巫が術を以て蠱を爲して以て人を詛ふなり。漢の武帝の時、方士及び諸の神巫、多く京師に聚まる。女巫、往往、宮中に往來し、美人に教へて厄を度し、木人を埋めて祭祀せしむ。會〻帝病む。江充、疾は巫蠱に在りと言ひ、宮中を掘り鑿つ。充、

滅。因并衆降匈奴。得來還。千人一兩人耳。游擊說無所得。因杅敖與左賢王戰不利。引歸。是歲。漢兵之出擊匈奴者。不得言功多少。功不得御。有詔捕太醫令隨但。言貳師將軍家室族滅。使廣利得降匈奴。

太子據と隙有り。因つて言ふ、太子の宮に木人を得ること尤も多しと。太子恐れ、充を收めて之を斬り、兵を擧げて反す。尋いで敗れて自殺す。事は征和二年に在り。4功、御るを得ず。其功、相當るを得ざるなり。功に相當する取扱を受くることを得ざるを言ふ。

太史公曰。孔氏著春秋。隱桓之閒則章。至定哀之際則微。爲其切當世之文而罔褒。

[1]太史公曰はく、孔氏、春秋を著はすに、隱桓[2]の閒は則ち章かに、定哀の際に至りては則ち微なり。其の[3]當世に切なるの文なるが爲めにして、褒する罔し。忌諱するの辭なり。世俗の・匈奴を言ふ者、其の一[4]時の權を微めて・務めて譎ひて其說を納れ・以て偏[5]指に便んじ・彼[6]己を參ぜざる

忌諱之辭也。世俗之言匈奴者。患其徼一時之權。而務謂納其說。以便偏指。不參彼己。將率席中國廣大氣奮。人主因以決策。是以建功不深。堯雖賢。興事業不成。得禹而九州寧。且欲興聖統。唯在擇任將相哉。

を患ふ。將率は中國の廣大なるに席りて氣奮ひ、人主因つて以て策を決す。是を以て、功を建つること深からず。堯[3]は賢なりと雖も、事業を興して・成らず、禹を得て九州寧し。且つ聖[9]統を興さんと欲せば、唯だ擇びて將相に任ずるに在るかな、唯だ擇びて將相に任ずるに在るかな。

1太史公曰はく云云。此贊は三段として見るべし。第一段には、孔子が春秋を著はすに、定公・哀公の際に至りては、隱微の辭多きことを言ひ、以て己が當世を褒貶せざるの地を爲す。第二段には、匈奴を伐つに文武の官に其人を得ざるを以て、功を立つること深からざるを言ふ。第三段には、聖統を興隆せんと欲せば、文武の大官に其人を得るを要するを言ふ。文臣、上に諂ひて其說を容れ、武臣、中國の廣大なるに席りて氣奮ふは、固より人臣の罪なり。然れども其本を推して言へば、罪、人主が因りて以て策を決するに在り。而して最後に、丞相・將帥を收めて人主に及ぶ。太史公の意、微なり。謂はゆる忌諱の辭なり。2隱桓の閒は則ち章かに云云。隱公・桓公の時代の事を說くときは、文辭明白なり。而して孔子の時の魯公なる定公・哀公の事を說くときは、文辭隱微にして明白ならず。3其の當世に切なるの文なるが爲めにして、褒する罔し。定公・哀公の時代の事を記する文章は、孔子の當時に近接する事を記する文章なるが故に、孔子は褒貶すること無し。忌み憚りたる文辭なり。ここに褒を言ひて貶を言はざるは、故らに省略したるなり。4一時の權は一時の權宜の說なり。徼むは遮り求むるなり。5偏指。偏見なり。偏に一時の利害の旨のみを見るをいふ。6彼己を參ぜず。彼己は彼と我となり。參は參覈するなり。彼と我との情勢を參酌せざるなり。7將帥

將帥なり。席は因るなり。氣奮ふは意氣奮ひ揚るなり。8堯は賢なりと雖も、事業を興して成らず、禹を得て九州寧し。堯帝は賢聖なれども、獨り天下を理むる能はず、賢臣禹を得て其輔佐に因りて、支那の全土九州安寧なりき。以て、武帝が賢明なる將相を擇ぶ能はずして、務めて小人の諂諛の說を納れ、多く匈奴を伐ち、萬民を壞りしを刺るなり。9聖統を興さんと欲せば、唯だ擇びて將相に任ずるに在るかな。聖天子の統業を興さんと欲せば、唯だ務めて賢將明相を選擇して之に委任するに在るなり。

昭和十六年十月一日印刷
昭和十六年十月五日發行

著作權所有

史記列傳〔二〕

新定價 四圓五拾錢

著者 加藤繁
著者 公田連太郎

東京市神田區神保町一丁目三番地
發行者 合資會社 冨山房
冨山房社長
代表者 坂本守正
會員番號一二八五一〇
東京市神田區神保町一丁目三四番地
印刷者 株式會社 開明堂

東京市神田區神保町一丁目三番地
發行所 合資會社 冨山房
振替口座東京五〇一番
電話神田(25)二、一七一—八番

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

史記列傳（全三册）

第一　伯夷列傳第一より刺客列傳第二十六まで（既刊）

第二　李斯列傳第二十七より匈奴列傳第五十まで（新刊）

第三　衞將軍驃騎列傳第五十一より太史公自序第七十まで（續刊）

加藤繁・公田連太郎譯註・各册約八百頁

49F48

NO. 18786

48